

黄門要石を掘る

鹿 島神宮の奥宮の近くに要石があります。直径四十センチメートルほどの円型の小さな石です。神様が地上に降りた時すわられた石で、根が地下深く通じ、終わる所なく、大地震のもとである鯰なまずを押さえているといわれています。

ある時、徳川光圀とくがわみつぐが、この話を聞き、本当かどうか掘って確かめようといいました。家来たちは神罰をおそれ反対したのですが、光圀は聞き入れませんでした。

さつそく、人夫を集め、一日で五メートルほど掘り下げました。

次の朝、人夫の一人が光圀のもとへきて、昨日掘った穴がきれいに埋めつくされているというのです。

怒った光圀は、昨日以上の深さに穴を掘らせた上に、そばに見張り小屋を建て、寝ずの番をさせました。

ところが次の朝も同じでした。

光圀は、すぐ現場にかけて確かめましたが、つけて確かめましたが、誰一人としてうそをついている様子はありません。

「埋められるのは、作業をやめるからだ。今日から昼も夜も掘り続けるのじゃ。」

光圀の声がかりで、さらに沢山の人夫が集められ、昼夜交替で七日間掘り続けました。

その夜のこと、眠っている光圀の耳に不思議な声が聞こえてきました。

「光圀。要石を掘りたい気持はわかるが、物には限度というものがあるぞ。人間、それを忘れると、いつか禍いがふりかかるものだよ。」光圀はびっくりしてとびおきました。

次の朝、光圀は家来や人夫を集め、「これだけ掘り続けてもビクともしない要石は、間違いなく地中の根に達しているにちがいない。もう穴を掘るのはやめにしよう。」といったそうです。

